

---

# ラブアンドライアンドクレイジー (FA/RE)

omotenac

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブアンドライアンドクレイジー（FA／RE）

### 【Nコード】

N0540N

### 【作者名】

omotenac

### 【あらすじ】

ロイエド。しょうもない小ネタ

遠慮がちなノックの後ドアが開き、こちらの了承も待たず顔を覗かせのはほんの今しがた飛び出ていった子供だから驚く。

「忘れ物かね？」

右手にペン、左手に書類を持つ姿勢のまま顔だけそちらに向けて問えば、子供は金色の髪が揺れるほど大げさに首を横に振った。走ってきたのか肩で息をし、頬もひどく赤い。

りんごのほっぺ、と周囲の大人たちに言われるのを彼はひどくいやるが、運動や激情ですぐに赤くなる頬は子供らしく、ついからかいたくなるものがあつた。

「ちよつと……ここ、いてもいい？」

この少年、エドワード＝エルリックがこんなにしおらしい態度を見せるのは珍しいことで、なにか理由があるにしても聞きだすことは逆効果だとロイは知っている。だからこちらは何事もないように承諾を返した。

「どうぞ」

おじやまします、と。さっきはドアを蹴破るようにして飛び込んできたのに、今度はずいぶんしおらしくきっちり両手でドアを閉めてから部屋の中に進んできた。右腕にはいつも着ている赤いコートと、今しがたロイが渡した鍵を持って。

広い執務室には部屋の主であるロイが使う大きなデスクと、上品な革張りのソファセットがある。大抵ロイが彼を呼びつける時には執務机の前に立たせるのだが、エドワードは呼び出しの時のように机の前に立った。

「あの、さ」

そう一言だけつぶやいて、けれど少年の声はそれ以上続かない。そこでようやくロイはペンを置き、目の前に立つ少年の顔をもったいぶった動きで見上げた。

なんだ、どうした、と問うわけでもなくただ言葉をロイは待つ。そんなロイの態度にエドワードは一人で困ったように目や口元を動かして、しばらくしてから決心したように口を開いた。

「…人が、いるんだけど」

「特別資料室に？」

責任者であるロイが持つ鍵がなければ立ち入ることのできない空間に部外者がいたというなら大問題だ。通常五段階にわけられる資料重要度の中、尉官以上しか閲覧が認められない3から4に相当する資料が集まる部屋に許可なしに入り込んだとなれば立派な規律違反。減給どころでは済まない処分が待っている。

思わず腰を浮かしたロイに、しかしエドワードは違う、と否定の返事をよこした。

「隣だよ。準備室の方」

「…それを早く言いたまえ」

特別資料室に関する規則は厳しい。持出禁止は当然のことながら、尉官以下には資料室内への立ち入り自体が規制されており、準備室はその、資料室への立入も許されない者が資料を閲覧するための場所だ。

テーブルと椅子が何客かあるだけの殺風景な小部屋になら定期清掃で人が立ち入ることもある。

しかし、エドワードの様子からすれば準備室にいたのは掃除係などではないようだ。

「椅子を、借りて こうと思って」

エドワードは小さな声でそう説明した。そのどこか困ったような表情で大体の事情は見てとれる。

十五歳という年齢の平均よりも小柄なのをコンプレックスにしているエドワードのことだ。手の届かない位置の本をとるための足場を用意していたと知られるのが恥ずかしいのだろう。

「それで、誰がいたというんだね？」

いつもならそこで一つからかつてやるのだが今日は取り急ぎ話の

先を求めれば、エドワードはロイの顔をしばらく眺め、それから少し視線をそらして答えた。

「知らないけど、軍服着てた」

「鋼の…」

その子供が悩みながら出した答えはどうにも曖昧すぎて、ロイは多少大げさに肩を落とした。

「あのね、ここはどこかわかってるかい？」

「…東方司令部」

「そう。国土の四分の一を管轄する東方司令部だ。アメストリア国軍の」

肘付きの立派なチェアに背中を預け、ロイは己の胸元を叩いて示した。手で触れるのは青い軍服。肩に輝く階級章は、通常なら二十代では得ることのできない大佐の地位を示している。

「同じ服を着ている人間はこの司令部だけでも三千人以上いるんだ。もつと具体的、髪の色や身体的特徴を覚えてくれないと。そもそも、何をしていたんだねそいつは」

当然の状況確認をすれば、エドワードは赤い顔をさらに赤くした。おや、と思えばためらいがちに言葉を告げる。

「その…なんていうか…男の人と、女の人が…」

たとえロイでなくとも、軍人がそこまで訊けば予想できる答えは一つしかなかった。

つまりあれだ。いささか非常識だが、人目につかないところで行われる男女の性的行為。しかし直接的な単語を使えばこの少年は気絶するほどに動揺しそうだし、ましてや茶目っ気を出して『君とわたしが行うようなこと？』などと聞けばたぶんこの執務室は戦場と化す。

「通常なら…プライベートの時間と空間で行うような行為？」

遠回りの表現だが通じたらしい。エドワードはどこか気まずげに頷いた。

軍人は、よっぽど上の階級を覗けば昼夜問わず仕事に追われる不

健康な生活を送る宿命にある。生活時間帯のすれ違いから恋人もつかれない、いても相手と会う機会が少なく、浮気された、振られた、という話など当たり前すぎるほどにありふれている。だから、自然と体に溜まる欲求を手近で済ませる傾向があるのだ。相手にしろ、場所にしろ。

考えてみれば普通に入隊する直後の十八前後の若者だってその事実に直面すれば驚くのだから、今や職業でもある錬金術のこと以外は妙に世間知らずの、まだ十五歳になったばかりのこの子供が驚いてしまうのも無理はない。

いや、そういう状況に平然と対応できるほかの軍人の方が世間一般から見ればおかしいのかもしれないが。

職場で性行為に及ぶ勇気のある人間は決して多くはないが、少なくもない。そういう行為に及ぶのに最適なスポーツや時間帯というものもは若い下士官たちの間でひそやかに伝えられており、ロイの耳にも噂話としては届いていたが、しかしなるほどあの準備室は盲点だったとも思う。南棟は三階建てのほとんどが資料置き場で、特に特別資料室のある三階はフロア全体がほとんど人の立ち入らない空間。出入りさえ気をつければ人が来る心配もせずことに及べる絶好のポイントだ。しかし、盛り上がっている最中に子供が飛び込んできたならさぞ驚いたことだろう。さて、その子供にどうやって説明するものか。ロイはサインの手をとめ考えたが、この子供には遠慮なくダイレクトな説明の方が色々な意味で効果的だと知っているからずばり切り出した。

「君もそのうちわかるだろうから教えておくよ、鋼の」

「…なに」

まだ頬の火照りが引かない子供は不審げにロイを見る。こうやって疑ってかかるくせにすぐに人のいうことを信じるのだから可愛いものだ。なにもかも信じこんでいるような顔をして実のところは常に警戒を怠らない弟と、足して割ればちょうどいいのではないだろうか。

「大人には、特に我々軍人には、そういう欲求が溜まってどうしようもなくなることがあるんだ」

「よ……」

別にたいした言葉でもないのにエドワードは酸欠の魚のようにぱくぱくと口を動かす。そんな反応のひとつひとつがロイを楽しませていることに彼は気づいていないのだから、余計に面白い。

「例えば、君だって死にそうなくらいお腹が空いたら思い切り食事を食べるし、眠い時はとても読みたい文献が目の前にあっても寝てしまうようなことがあるだろう？」

ねえ、と尋ねれば子供は小さく頷いた。

「それと一緒にだよ。逆らえない人間の本能。」

なにせ食欲と睡眠欲に並ぶ欲求だからね。驚いたろうが、仕方のないことだと理解しておきたまえ

今後もし鉢合わせた時は悲鳴などあげずに速やかに撤退すること。

もしその場所に用事があるのなら、逃げる猶予を与えておくくらいの気遣いは必要だぞ。男はともかく、ご婦人のことを考えるとね」

職場で性行為にもつれこめるような若者に他人がマナーやら気遣いを見せるのもおかしい話ではあるが、この子供に見つかるということはイコール直属の上司であるロイに報告が行くのでは、と余計な心配を抱かれる可能性もある。問題には極力近づけないのが懸命だ。

「返事は？」

「わかった……」

とても上司に対するものとは思えない口調で頷いたエドワードは、しかしいつまでも机の前から離れようとはしない。さすがに衝撃的な発見をした現場にすぐ行く気は起きないのだろう。

「出直して来ないか。あいにく今日は忙しくて無理だが、明日の午前中は暇だから付き合っよ」

「……いいよっ！」

ロイの提案に子供は慌てたように首を横に振った。

「そんな、別に俺平気だからっ…今行ってくる！」

今にも駆け出して行きそうな彼の慌てぶりの理由は簡単に読み取れた。

「なにもしないよ？」

子供の単純さがほほえましくて自然こぼれる笑みと共に言葉を向ければ、やはり図星だったらしい。エドワードはまるで毛を逆立てた猫のように体を固まらせている。

「君に触れたいという気持ちはあっても、私は大人だから、安全な場所以外ではブレーキをかけるんだよ」

こんなところではなにもしないよ。付け加えればそれで安心できたのだろうか。エドワードは広い執務机を回り込んでロイの元までやってきた。

「鋼の？」

いつもなら呼んだって来てくれないのに。なにごとだと仕事の手をとめるロイと小さな恋人は、ロイが座ったことで視線の位置がほとんど変わらない。

なにをするのかと待っていれば子供の腕が伸びて、ロイの首筋にしがみついていた。小さな体は温かく、間近にある髪の毛からはシャンプーだろうか気持ちのいいにおいがする。なにをするわけでもなくじっと抱きついてくる様は猫のようで、一体どんな考えがあるかは知らないけれど、ロイは体の力を抜き、子供の好きにさせた。熱く眩暈のするような情交を求めがただけれど、こうやってそつと触れてくるだけのぬくもりも悪くない。

がつしりと抱きついて、一秒、二秒、三秒…十秒を数える頃にそろそろと腕が、そして体が離れていく。

「…ほんとだ」

すっかり体が離れてしまふとなんだかひどく寂しい。いつそ自分から手を伸ばして抱き寄せようか、などと不埒なことを考えていたら、子供がぼつりと呟いた。

「ちゃんと我慢できるんだ、あんた」



「…ちゃんと？」

「だって…あんだだからなんかするんじゃないかって思ってた…」  
「ほお」

言ってくれるではないか。どこか恥ずかしそうな子供の後ろに手を回し、ぐいと抱き寄せる。いくら鍛えているとはいってもこういう時に隙を見せるのがエドワードの欠点で、横抱きにして膝の上に乗せるのは簡単なことだった。

「お望みなら『なにか』させていただくが？」

抱きしめた上半身を、赤ん坊を抱くように寝かせて真上から顔を覗き込む。

捕らえられた子供はいつもなら無理な体勢からも拳を振るってくるのに、今日はあまり抵抗を見せない。

けれどくちづけようと顔を近づければ金色の瞳がどこか泣き出しそうに曇るから、結局額にくちびるを押し当てるだけにとどめた。

「大人をからかうんじゃないよ」

ぼやけるほど間近で笑いかけて、額同士を軽くくつつけた。

「もっと余裕のない時だったら、このまま隣に君を連れこんでしまっぞ」

隣というのはこの広い個人執務室に隣接する仮眠室のことで、そこにはロイ以外誰も立ち入りは許されない。

露骨な表現を使えばいつものエドワードはすぐさま怒って暴れるからそうなる前にぱつと拘束を解いてやる。

開放されたらすぐに逃げ出すだろうと思っていたのに、けれど立ち上がったエドワードはそこを動かなかった。

「大佐、今ヒマ？」

「忙しくないね」

特に急ぐ用事や面会もない。少し長めのティータイムを楽しんでも許されるのではないだろうか。

「じゃ、ちよつと来い」

すると子供は軍服の袖を掴んでロイを立ち上がらせる。件の資料室

行きだろうとされるがままに立ち上がれば、しかし彼は外へなく、先ほどロイが話題に出した仮眠室に繋がるドアに手をかけた。

「…鋼の？」

「オレが」

仮眠室のドアが開く。メイクされた綺麗なベッドはシングルサイズで、けれど小さなエドワードを抱いて眠るくらいなら支障はないサイズだと冷静に判断する自分がおかしい。

「オレが、余裕ない」

吐き出された言葉になんとか自分の方が気恥ずかしくなってしまう。

それはつまり、初めて彼から自分を誘ってくれているということ。しかしどうせならもうちょっとゆっくりできる自宅の方が良かった。などと考えられたのは最初だけで。

小さい甘い体に触れたら、大人のブレーキはあっさり壊れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0540n/>

---

ラブアンドライアンドクレイジー（FA/RE）

2010年10月10日18時36分発行